

令和元年8月25日

鹿児島大学大学院人文社会科学部研究科長 殿

学位（博士）論文審査の概要及び結果報告書

地域政策科学専攻 氏名 周 倩

学位論文題目

村上春樹研究——語りの諸相と自他の表出——

(A study of Haruki Murakami: Aspects of Narration and Representation of the self and others)

論文審査の概要

1. 本論文の目的

本論文は、村上春樹が「デタッチメント」から「コミットメント」へとその作品創作の態度を変化させたとされる1990年代から2000年代前半にかけて発表した作品を対象とするが、従来社会的な事件や作品外の要素と結び付けて論じられてきた手法を排して、物語技法、特に「語り」と自他の表出に注目し、作品内部からこの時期の村上の文学的な営為を読み解き、再評価しようと試みたものである。

2. 本論文の構成

本論文は、村上文学の特徴や村上作品の表現構造の特徴を整理した序章、1990年代から2000年代前半にかけて発表された5つの作品を、一作品ずつ発表順に各章に配分し分析した第一章から第五章、そして最後に各作品の物語の構成や表現法からみて上記の時期の村上の営為を位置づける終章から成っている。

第一章は「TVピープル論」である。1989年に発表されたこの作品は、村上自ら何も書けない落ち込み状態から復帰したという重要な作品である。先行研究では、TVピープルというわけのわからない存在の侵入によって生じる自己の存在感の希薄化や不安がテーマであるとされるなど、情報化社会やメディア論の文脈で解釈されることが多かった。これに対して論者は、語り手「僕」が侵入してきた「TVピープル」および「僕」以外の他者をいかに語っているのかを丁寧に分析す

る。不思議な侵入者についての「僕」の語りが進行するに従って、「僕」の認識と他者との反応のずれが際立ち、これによって他者よりも「僕」の反応の異常性が印象づけられ、ひいては「僕」の见えない部分が浮き彫りにされる。さらに「僕」の視点から語られていた世界は、破綻へと導かれる。

論者はこの作品を、一人称表現の限界(不安定さ)を巧みに利用して、安定しているかに見える日常性の不安定な様を浮かびあがらせるとともに、「僕」という人物の〈偏り〉や「僕」自身の気づかない「僕」の姿を照らした作品であり、「TVピープル」は、村上作品史のなかで一人称単一視点を極点まで推し進めた作品であると結論付けている。

第二章は、「『レキシントンの幽霊』論」である。この作品は、1996年初出のショートバージョンとその後書き改められ単行本に収録されたロングバージョンの2つのテキストが存在する。論者は両者を比較し、ケイシーとその父親の父子関係を暗示するレコードのコレクションや古い屋敷の内部描写が大幅に加筆されることに着目、これによってケイシーの父に関する感情の具現化が図られていると同時に、物語の力点が父子関係に置かれていることを指摘した。それを踏まえ、「僕」が出会う幽霊話の語りとその後のケイシーの告白を聞く「僕」が、一人称の語り手であると同時に三人称的な立場からケイシーを観察する局外者としての立ち位置との二重の機能を持っていることを指摘する。同じ父子関係を扱い、人物設定にも「レキシントンの幽霊」との共通点の多くあるが三人称の語りを採用する短編小説「トニー滝谷」と比べることにより、「レキシントンの幽霊」に三人称視点と一人称表現が混在することによってより客観的かつリアルに感情が表現されていること、この作品がケイシーの父との関係の物語というだけでなく、「小説家」である「僕」の自己言及の物語であることを指摘し、村上作品史のうえで本作品は人称表現の変化する兆しを示す作品であると位置付けた。

第三章は、「『スプートニクの恋人』論」である。1999年の本作品は、小説家をめざすすみれが、韓国籍の既婚女性ミュウに恋をし、その後失踪する物語で、すみれに好意をいづく「ぼく」の語りを中心に、すみれの語りや手紙や作品を交えた複雑な構成をとる作品である。論者はこの複雑な語りの構造に焦点を当てて、この作品が傍観者として設定された語り手「ぼく」の物語であることを明らかにする。語る内容のなかに語り手自身が含まれることによって必然的に自己呈示の物語となるが、作者の意図は、自己呈示自体よりも自己言及の物語をいかに客観的に表現できるかということにあるとする。つまり、この作品は、語り手の位置変化の調整を通して自己言及的な要素を内包する作品であり、いかに自己言及をより客観的に実現できるかを探る作品であると位置付ける。

第四章は「『アフターダーク』論」である。「正直に語ること」の困難さを自覚した村上は、自分自身について他人に伝えることがうまくいかない人物や語ることを保留する人物を作品に登場させてきたが、2004年の『アフターダーク』もその延長線上にある作品である。『アフターダーク』はエ

りとマリの姉妹の一夜のそれぞれの物語が、時間軸に沿って、一人称複数の「私たち」という超越的な視点を通して語られる。この作品も従来、管理社会に内在する「暴力」や「恐怖」といった観点から論じられ、また倫理的な観点から批判されてきた。論者は、「語り」に着目して語りの中断あるいは断片化といった手法を通して、本作品が〈語りの難しさ〉をテーマとしながら、対照的な構造と構成を工夫した物語であることを明らかにする。

第五章は「偶然の旅人」論である。2005年に発表された短編である「偶然の旅人」を、「聞き書き」という形式および複雑な人称形式の利用という観点から分析する。論者は、「聞き書き」利用という観点からみると村上作品史の転換点を示す作品であることを指摘する。たとえば、『回転木馬のデッド・ヒート』(1995年)では相手から提示された意見や言葉に対して、「僕」の態度は肯定的な反応は行わないものを打ち切るか黙って聞き続ける態度をとる。ここには「僕」の物語からの飛躍は見られるが、語り手と聞き手(僕)との葛藤や対立は描かれない。これに対して「偶然の旅人」では、語り手「僕」が「彼」の結論に反論したり、意見の差異が浮き彫りになったりするような仕掛けが施され、それまでの自他の描出とは明らかに異なるものである。一人称表現の可能性を利用しながら、語りの位相を調整して他者を構築する試みを行っている作品であると評価する。

終章は、全体のまとめである。村上春樹の作品はその初期から2000年代の作品に至るまで、他者の物語を繊細に描きだそうという試みが続けられてきた。その中で、初期作品に登場する一人称視点人物「僕」の存在が徐々に希薄になり、「僕」という人物が語り手に登場人物を兼ねた存在に切り替わっていく。しかしその「僕」は以前の作品にしばしば見られたような自己を投影する対象や自己の内なる他者性を照らし出す存在でもない、新たな「他者」を描き出している。村上文学は自己と他者を描くことに挑戦し、人称の工夫など表現法の工夫による試行錯誤を続ける文学であると結論付ける。

3. 本論文の評価

1) 評価されるべき点

本論文の第一に評価される点は、1990年代から2000年代前半にかけて発表された村上春樹の作品を一貫してナラトロジーの観点から、語りや人称表現にかかる特徴的な5作品を取り上げて、異なるテキストの比較や、初期作品との比較を行いながら丁寧に論じている点、第二に、先行研究にあるような社会的な事件と結び付けて論じたり、倫理的な観点からの評価を行ったりせず、作品の語りの構造的な把握を通して、作者の行った試行錯誤の軌跡を掘り起こそうとした点である。世界的に多くの読者を持ち、研究も汗牛充棟という状態にある村上作品をどのような観点から論じるのかを定めること自体が難しい中であって、期間を限定はしているが、村上の他者を描く方法を時系列的に跡付けている点に高い評価を与えることができ、個々の作品論も一定の水準を超えたものとなっている。また、人称や自他表現への強いこだわりは論者の研究者として

の良き資質が本論文に現れており、将来性が垣間見えるものとなっている。

2) 問題点

問題点としては、ナラトロジーの利用がやや形式に随している点是否定できず、作品内に散りばめられた豊富な記号の検討を含めた登場人物やモノの意味の分析がなされる必要があること、先行研究を立場が異なるとして一部最初から取り上げなかったり批判的に扱っていなかったりする点などがあり、作品論としての厚みに欠ける憾みがあること、人称や自他の表出だけを根拠として、性急にこの時代の村上文学の「内実」としてしまっていること、他の村上作品に描かれるパラレルワールドに対する評価がないことなどが指摘された。また、村上作品史において現在はいかなる時代なのかという視点や現代文学史のなかでの村上文学の位置付けといった問題に触れていない点も問題として残っている。

4. 総合評価

本論文には、上記のようないくつかの問題点が存在するものの、前述したように数多くの村上文学の研究の蓄積があるなかで、一貫して人称表現と自他の表出に注目し、1990年代から2000年代前半期の作品を通して作家の営為を再評価しようとして一定の成果を出しており、また、個々の作品論としても重要な読みを提示していることに鑑み、審査委員は全員一致して、博士(学術)の学位を授与するに値する内容を有する研究であると認定した。

授与する博士学位 学術

論文審査結果 合

審査委員

主査 丹羽 謙治

副査 高津 孝

副査 竹岡 健一

副査 波瀾 剛

副査 多田 蔵人